

## 平成20年度事業報告

### 1. 会議の開催について

- |              |     |       |        |
|--------------|-----|-------|--------|
| (1) 理事会の開催   | 第1回 | 平成20年 | 5月19日  |
|              | 第2回 | 平成21年 | 3月5日   |
| (2) 常務理事会の開催 | 第1回 | 平成20年 | 9月18日  |
|              | 第2回 | 平成20年 | 10月24日 |
|              | 第3回 | 平成20年 | 11月27日 |
|              | 第4回 | 平成21年 | 1月8日   |
|              | 第5回 | 平成21年 | 2月19日  |
| (3) 評議員会の開催  | 第1回 | 平成20年 | 5月19日  |
|              | 第2回 | 平成21年 | 3月24日  |

### 2. 事業の実施について

研究所の自主研究および各種研究の概要は次の通りである。

- (1) 1号事業 人間の全ライフサイクルを通じての健康投資（バイオ・インシュアランス）モデルに関する調査研究

○脳・心と教育研究会（自主研究A）

- (1) 脳科学と芸術シンポジウムⅡ（平成20年 8月30日）

内容は下記の通り。

- |                         |           |           |
|-------------------------|-----------|-----------|
| ① 脳科学と芸術の概念             | 日立製作所フェロー | 小泉 英明     |
| ② 音楽研究会ら学ぶ行為の脳機能        | 京都大学      | 脇田 真清     |
| ③ 音楽における階層構造について        | 東京藝術大学    | 古川 聖      |
| ④ テナガザルの歌とヒトの音楽         | チューリッヒ大学  | トマス・ガイスマン |
| ⑤ 歌から言葉へ：音楽と言語を実現した脳の進化 | 理化学研究所    | 岡ノ谷一夫     |

⑥ 全体討論

- (2) 脳科学と芸術シンポジウムⅢ（平成21年 3月14日）

- |                  |            |       |
|------------------|------------|-------|
| ① 感覚の進化と音楽の起源    | 東京大学教授     | 伊福部 達 |
| ② 情動の進化と音楽の起源    | 慶応義塾大学名誉教授 | 川村 光毅 |
| ③ 進化生態学から見た音楽の起源 | 理化学研究所     | 岡ノ谷一夫 |
| ④ 上記講演者によるパネル討議  |            |       |
| コメンテーター          | 東京芸術大学准教授  | 古川 聖  |
| 総合司会             | 日立製作所フェロー  | 小泉 英明 |

- (2) 「脳科学と芸術」と題した単行本の出版（平成20年11月）。

編著：小泉英明、執筆者と題目は下記の通り。執筆者の多くは、我国の脳科学・芸術の分野にて、中心的に活動している方々が多い。

（なお、後書きにて、(財) 生存科学研究所の脳・心と教育研究会にて「脳科学と芸術」研究を推進した経緯を明記してある。）

第1部 恋う：芸術衝動の由来と発達

- ① 岡ノ谷一夫 小鳥の歌に見られる美の進化  
小鳥はなぜうたうのか／小鳥の歌が美しいのはなぜか／歌学習の進化

- ② 齋藤亜矢 絵筆をもったチンパンジー——描くことの起源を探る  
チンパンジーの筆さばき／「ない」ものを描くということ／想像と創造
- ③ 港千尋 心の洞窟——イメージの起源へ  
問いとしての洞窟／イメージの共同体／闇の意識  
[間奏1] 入来篤史 脳内の時空処理
- ④ 川畑秀明 脳はなぜ美に魅せられるのか  
美術の背後にある視覚脳／視覚脳の延長としての美術／芸術の美しさを脳から探る
- ⑤ 金沢創+山口真美 赤ちゃんの運動視の発達からみた「物世界」の起源  
最初の運動視はいつ？／3か月以上5か月未満の不思議な世界／4か月から5か月ごろに成立するもの
- ⑥ 保前文高+多賀巖太郎 言葉と音楽を育む赤ちゃんの脳  
乳児にとっての言語情報／言語発達の2方向性／言語と音楽の接点
- ⑦ 川村光毅 音楽する脳のダイナミズム  
聴く脳・楽譜を読む脳／音楽を傾聴する脳／演奏する脳・歌う脳
- ⑧ 北浜邦夫 夢・幻想・芸術  
胎児は夢を見ている／夢と幻想絵画／フロイト博士登場  
[間奏2] 北澤茂 目や手の動きで変わる時間の流れ  
第2部 癒す：やわらかい脳と芸術的創造力
- ① 河内十郎 脳損傷と芸術——特に造形芸術について  
失語症が芸術的創作活動に及ぼす影響／視覚イメージの喪失の影響／半側空間無視と創作活動  
[間奏3] 齋藤公子+小泉英明 幼児に芽生える芸術の心
- ② 野田燎 音楽運動療法による癒す力の喚起  
ライフワークの予兆／脳神経回路の再編／意識障害患者の音楽運動療法実施例
- ③ 舘野泉 左手のピアニストとしての新生  
ステージ上で倒れる／ばねが失われた右半身／吉松隆「ケフェウス・ノート」で協奏曲再デビュー  
[間奏4] 吉松隆 音楽の神が降りてくるところ
- ④ 緑川晶+河村満 脳損傷による芸術活動の障害と発現——神経心理学の視点から  
音楽／絵画／書字
- ⑤ 中井久夫 共感覚者のイメージ世界  
アルファベット 26文字それぞれの色／言語化しえぬ心の世界によりそうアートセラピー
- ⑥ 伊福部達 音楽の起源——福祉工学の前線から  
聞くことの起源／歌う起源と人工喉頭の開発／民族の響きから、それを越えた普遍的な響きを求めて  
[間奏5] 檀一平太 料理するサルと脳の進化  
第3部 究める：遊びから至高体験へ
- ① 大橋力 至福の音体験と脳——全方位非分化型アプローチの射程から  
「美」と「智」の空白地帯からの発端／原始的アプローチからの〈ハイパーソニック・エフェクト〉発見
- ② 湯浅譲二 音楽の始源性への道  
芸術にも発明発見が不可欠である／未聴感の音楽をめざす／私のコスモロジーの醸成と実験工房での切磋琢磨  
[間奏6] 篠田桃紅 玄のおもいとかたち

③ 高橋アキ 新しい耳をひらく鍵  
体系化されたクラシックへの反発／人間的な感情を音にのせる／音楽で「向こうの世界」と交感する

④ 北岡明佳 錯視アートの醍醐味  
錯視のエンターテインメント性と美／錯視と脳と芸術／錯視デザインと錯視アート  
[間奏7]藤井直敬 直感と推論：香道からみた創造的脳機能

⑤ 高田みどり 寂静の世界への旅  
瞑想状態の脳波の音楽／身体からの再出発／菩薩との対話

⑥ 梅若猶彦＋小泉英明 世阿弥の秘伝書の極意をめぐって  
先天的な才能と後天的経験／世阿弥の疑問符／非風を是風に  
[間奏8]渡辺英寿 能楽師の脳内観賞

⑦ 小泉英明 脳科学と芸術の明日にむけて  
芸術の基盤となる脳を知る／感じる脳・考える脳を観る／芸術とは何か  
[間奏9]小泉英明 「感性」という言葉の意味するところ——芸術と脳科学の架橋に向けて

(3) 科学の知見を基調にした日母語教育に関する基礎的研究。

成果の一部は、平成20年10月に日本で開催された、OECD・CERI（経済協力開発機構・教育研究革新センター）創立40周年記念のOECD・Japan Seminarにて報告・討議。なお、会議全体の基調公演には小泉英明がOECDから招請された。

○ 「元気と病気のあいだ」研究会（自主研究C）

(1) ヘルスポモーションの歴史と海外・日本での展開

平成20年 5月23日

順天堂大学スポーツ健康科学部教授 島内 憲夫

(2) 近代における漢方医学の「代替医療」化—Making Kampo “Alternative”

平成20年 8月13日

台湾・陽明大学公衆衛生大学院医療政策／STS 准教授

郭 文華

(3) 体の規範と柔軟性—健康と病気の間—

平成20年 9月18日

東京大学大学院人文社会系研究科教授 松永 澄夫

(4) 温泉は治すのか癒すのか

平成20年12月 3日

有限責任中間法人 日本温泉気候物理医学会理事・日本赤十字社医療センター リウマチセンター長 猪熊 茂子

(5) 韓国における元気と病気の間：人々の行動様式とレギュレーション—

平成21年 3月12日

慶熙大学校薬学大学 衛生化学教室教授 丁 世榮

(6) がん医療における「なおし」と「いやし」

平成21年 3月25日

金沢医科大学医学部腫瘍内科学部門 教授 元雄 良治

○生存科学研究会（自主研究E）

(1) 自主事業の評価1

平成21年 3月 5日

フランスの医療改革に関する研究会責任者 府川 哲夫  
生存環境における「癒し空間」の創造研究会責任者 藤原 成一  
医療政策研究会 神谷 恵子

(2) 自主事業の評価2

平成21年 3月12日

口腔環境研究会責任者 小島 静二  
脳・身体の日内リズムに基づいた教育・学習研究会村越 隆之  
脳・心と教育研究会責任者 小泉 英明  
元気と病気のあいだ研究会責任者 津谷喜一郎

(3) 自主事業の評価3

平成21年 3月17日

現在の保健医療制度の源流を探る研究会責任者 杉田 聡

(4) 自主事業の評価4

平成21年 3月26日

人類生存に向けたナノテクノロジーの可能性と倫理研究会責任者  
大林 雅之

(5) 生存科学研究会シンポジウム『人生の健康—よりよく老いを生きる—』

よりよく老いを生きる

人間総合科学大学教授・前参議院議員 阿部 正俊

老人の心身の健康について

人間総合科学大学副学長・東邦大学名誉教授・心療内科

筒井 未春

終末医療から老いを考える

人間総合科学大学院教授・生存科学研究所理事 青木 清

患者の立場からの提言

創価大学教授

伊藤 佑子

○川崎病研究会（自主研究F）

(1) 日本川崎病研究センターとの共同研究についての報告、評価

平成20年10月24日

日本川崎病研究センター理事長

川崎 富作

○フランスにおける医療改革に関する研究会（自主研究G）

(1) 研究会の趣旨確認

平成20年 4月 8日

(2) 3年間の研究活動検討、JSSP 8(2) Dec. 2009号にフランス特集

平成20年 6月 4日

(3) 3年間の研究計画議論、Les personnes agees dependants (2005) の検討

平成20年 7月11日

(4) IRDES の英文paper チェック、フランス出張のプラン

平成20年 9月12日

(5) フランスの介護金庫CNSAのヒアリング (2008.11.10) 報告

平成20年 11月14日

藤井 良治

(6) フランスの医療保険改革の流れ

平成21年 1月23日

藤井 良治

○口腔環境研究会 (自主研究H)

(1) 編集方針について

平成20年 6月27日

口腔環境研究会責任者

小島 静二

秋編集事務所代表取締役

秋元 秀俊

(2) 編集方針について

平成20年 7月10日

口腔環境研究会責任者

小島 静二

秋編集事務所代表取締役

秋元 秀俊

(3)小冊子「口腔環境の倫理的合理性」の作成

3年間の活動をまとめた小冊子は、生存科学研究所会員、日本歯科医師会、大学歯学部などに配布された。

○ 現在の保健医療制度の源流を探る研究会 (自主研究I)

(1)戦後の日米関係における日米医学協力

平成20年 7月 5日

国立国際医療センター適正技術開発・移転研究部 中村 哲

(2)戦後日本の国際保健医療協力について

平成20年10月11日

エイズ予防財団・理事長

島尾 忠男

(3)GHQ/SCAP文書の電子ファイル化

平成21年1月～3月

大分大学医学部

杉田 聡

占領期の保健医療改革を分析するために重要なGHQ/SCAP文書は、マイクロフィッシュとして国立国会図書館憲政資料室に収蔵されている。その資料の中で、PHW (公衆衛生福祉局) の日々の活動を記したDaily Journal (回覧日誌) はPHWの政策・活動を知るために重要である。そこでこのDaily Journalのデータベース化を行い、研究会メンバーの研究に資する計画を立てた。具体的には専門の業者にマイクロフィッシュからPDFファイルに変換する作業を委託した。本計画は将来的にはWeb上に公開し、国内外の占領史研究者の研究資源となることを目的としている。

○ 人類生存に向けたナノテクノロジーの可能性と倫理研究会 (自主研究J)

2008年度は5回 (通算第4回より第8回まで) の研究会を行い、2007年度の研究会において、主にナノテクノロジーをめぐるELSI (倫理的、法的、社会的問題) について検討した成果を踏まえ、ナノテクノロジーの倫理問題を議論するための哲学・倫理的枠組みについて研究を行った。特に、スタンフォード大学のデュピュイ教授に

よるナノエシックスの哲学的基礎付けの議論（2007年度に本研究会が協力し早稲田大学で行われた講演を中心とした議論）について、研究会メンバーが自分の専門分野の立場から議論、検討した。これらの成果は、研究会メンバーの共著論文として生存科学研究所の学術雑誌『生存科学』に投稿し、現在印刷中である。また、バイオエシックス（生命倫理学）の世界的権威であるエンゲルハート教授を招いた研究会（公開研究会）を東洋英和女学院大学死生学研究所の後援を得て開催し、ナノテクノロジーの倫理問題を考えるための基礎となる現在のバイオエシックスの国際的動向について講演していただき、ディスカッションを行った。この講演内容については同教授の承諾を得て、上記『生存科学』に投稿し、現在印刷中である。

(1) ナノテクノロジーのELSIの展開について

平成20年 7月 2日

早稲田大学准教授

河原 直人

(2) 「デーミウルゴス」的主体性の彼方ヘーデューピュイの「ナノエシックスの哲学的基礎づけ」をめぐる考察ー

平成20年10月10日

浜松医科大学医学部教授

森下 直貴

(3) 「NANOTECHNOLOGY と医療」概論

平成20年11月28日

仏教大学教授

村岡 潔

(4) A Critical Examination of the Impediments to Global Bioethics

平成20年12月12日

Professor of Philosophy, Rice University H. T. Engelhardt, Jr.

(5) ナノエシックス、ニューロエシックス、ステムセルエシックス

平成21年 3月31日

東洋英和女学院大学教授

大林 雅之

○ 「患者本位の医療」を支える仕組みとツールに関する研究会（自主研究M）

(1) シンポジウム「英国における医療の質・安全の取り組み」

平成20年10月19日

元英国医師会会長

Brian Jarman

共催： 厚労科学研究「医療の質・安全戦略」研究班

ブライアン教授の講演記録： （別紙1）

(2) 特別講演

①特別講演「医療事故対策とリスク・シェアリング」

平成21年 2月 7日

スウェーデン医療傷害保険公社最高責任者

Kaj Essinger

②パネル討議

事故対策における行政の役割と補償の考え方

厚生労働省医療安全推進室長

佐原 康之

プロフェッションの責任と質保証のしくみ-海外事例の紹介

金沢大学／戦略研究班 野村英樹  
医療の質管理と「医療リスク保険」の提案  
東北大学／戦略研究班 上原鳴夫  
提案へのコメント（患者の立場から）  
医療の良心を守る市民の会代表 永井 裕之  
カイ・エッシングガー氏の講演記録：（別紙）

○日本川崎病研究センター（共同研究）

(1) 国際共同研究：①英国（Oxford 大学）、イタリア（Parma 大学）での講演報告

主任研究者 自治医科大学地域医療学センター公衆衛生学部門  
上原 里程

②第9回国際川崎病シンポジウム（台北・台湾）

主任研究者 「川崎病の子どもを持つ親の会」代表 浅井 満

(2) 川崎病の長期疫学研究

主任研究者 自治医科大学公衆衛生学教授 中村 好一

(3) 国内多施設との共同研究：川崎病の原因微生物の網羅的解明

主任研究者 国立感染症研究所ウイルス第一部主任研究官  
水谷 哲也

(4) 委託研究

①プロテオミクス解析を用いた川崎病患者における冠動脈内皮細胞抗原の同定と病型分類

主任研究者 済生会京都府病院小児科 秋岡 親司

②川崎病冠動脈病変(CAL)形成に関連する遺伝子を網羅的に解析し新たな CAL 予測因子を開発する

主任研究者 九州大学小児科 池田 和幸

③免疫グロブリン療法不応答から冠動脈障害にいたるメカニズムの解明

主任研究者 千葉大学大学院医学研究院小児病態学  
江畑 亮太

④系統的動脈炎モデルにおける抗サイトカイン療法の血管炎抑制効果

主任研究者 東邦大学医療センター大橋病院病理部  
大原関利章

⑤川崎病発症におけるスーパー抗原関与についての研究～急性期患児の便中スーパー抗原遺伝子の検索～

主任研究者 和歌山県立医科大学小児科学教室学  
末永 智浩

⑥川崎病急性期における血管内皮細胞の Pathogen Associated Molecular Pattern(PAMP)と受容体の動態解析

主任研究者 富山大学部小児科 廣野 恵一

(5) 公募研究

①川崎病発症時の遺伝子プロファイリングによる川崎病発症にかかわる

遺伝子の探索および新しいサイトカイン治療の開発

主任研究者 日本医科大学付属病院小児科 阿部 正徳

②川崎病の病態究明と新しい治療法の開発：DNA マイクロアレイ法を用いた検討

主任研究者 北里大学大学院医療系研究科 緒方 昌平

③川崎病急性期の流血中の樹状細胞の動態とケモカイン・サイトカインの関与

主任研究者 久留米大学医学部小児科 岸本慎太郎

(6)平成 20 年度研究事業報告会

平成 20 年 6 月 7 日 (土) 於：東京 YWCA 13：00～17：00pm

(7)日本川崎病研究センター川崎病電話無料相談

60 件 (平成 20 年 4 月～平成 21 年 3 月における新規相談件数)

日本川崎病研究センター理事長 川崎 富作

(8)川崎病の教育ならび啓発活動事業

25 件 (平成 20 年 4 月～平成 21 年 3 月における講演・講義)

日本川崎病研究センター理事長 川崎 富作

(2) 2号事業 地球的な立場からの医療資源の開発と配分に関する調査研究及びこれらを通じた地域における生存基盤に関する調査研究

○生存環境における「癒し空間」の創造研究会 (自主研究D)

本研究は、「癒し空間」とはどのようなところかを、フィールドワークによって実地検証し、併せて、新旧の具体的事例の調査から今後の創造の方向を考察しようとするものである。また都市環境と伝統文化地域とを対比することで、「癒し空間」の質をも問おうとするものである。平成 20 年度のフィールドワークは以下の通り。

1. 平成 20 年 4 月 30 日～5 月 2 日 (大阪・和歌山)

大阪 (安藤忠雄設計・狭山池博物館他、フンデルトワッサー設計・大阪市ゴミ処理場他) 和歌山 (南方熊楠記念館、根来寺根本大塔、高野山奥の院他)

現代建築と環境との係わり、俗地内での聖空間創造の試み、古建築の地域環境との融和のあり方、熊野の自然環境を守った先人の知恵と思想、これらを検証することができたが、とくに現代建築家二人の環境への取り組みには学ぶべきものが多かった。

2. 平成 21 年 3 月 11 日～13 日 (石垣諸島・八重山諸島)

石垣島並びに周辺諸島の御嶽調査 (その立地、地形、構造、現状)

竹富島、波照間島の御嶽調査 (観光地化した島における聖所の現状)

石垣島と周辺諸島では、来間島と大神島を除き、御嶽はかつての村の精神の拠点であることが薄れつつあり、逆に観光地化した島では、御嶽は古式を保ち大切に守られている。外部の目によってかえって島民に御嶽の持つ意味が再認され、風化を防いでいると見える。自然環境と聖所と集落と島民生活との関係など、南島の御嶽から学ぶべきことは多い。

従前からの現地調査をふまえ、都市環境における聖空間、伝統地域における聖空間の立地、地相、構造を考察し、環境論的文化論として論著にまとめる予定である。併せて都市における癒し空間の修景にも当たる予定である。

- 生存科学研究会（自主研究E：1号事業参照）
- 川崎病研究会（自主研究F：1号事業参照）
- 口腔環境研究会（自主研究H：1号事業参照）
- フランスにおける医療改革に関する研究会（自主研究G：1号事業参照）
- 医療政策研究会（自主研究K）

今年度の活動成果物として、医療事故調査に関する医療安全調査委員会の第三次試案に対するパブリックコメント、医療事故調査に関する医療安全調査委員会の大綱案に対するパブリックコメント、院内事故調査体制に関する調査報告書(全社連病院52病院へのアンケート結果を踏まえて)および院内事故調査ガイドブックの作成(未完成)をあげることができる。

- (1) 新年度顔合わせ及び事業計画の確認

平成20年 4月 3日

- (2) 医療事故の対応と院内事故調査のあり方—名古屋大学の取り組み

平成20年 4月21日

名古屋大学附属病院心臓外科教授 上田 裕一

- (3) 医療事故の対応と中小病院の院内事故調査のあり方及び国民が安全について病院を評価する指標について

平成20年 6月 2日

医療の良心を守る市民の会代表 永井 裕之

- (4) 全国社会保健病院の院内事故調査体制に関する現状調査アンケートの分析

平成20年 6月23日

- (5) 事故調に対する民主党案の検討

平成20年 7月 1日

- (6) 医療賠償保険支払いのための医療事故調査について

平成20年 7月 7日

損保ジャパン リスクマネージメント事業部長 齊藤 裕一

- (7) シンポジウムの打ち合わせ及び全国社会保険病院の院内事故調査体制に関する現状調査アンケートの分析

平成20年 7月28日

- (8) 一般病院における内部調査委員会のあり方

平成20年 8月 5日

弁護士 木下正一郎

- (9) シンポジウムの打ち合わせ

平成20年 8月28日

平成20年 9月12日

- (10) シンポジウム「院内調査と『事故調』の役割—安全文化構築の契機となる事故調査を求めて」

平成20年 9月26日

第1部 パネルセッション

①医療事故調査のスキーム 神谷 恵子

弁護士・医療政策研究会研究責任者

②医療事故調査制度のあり方—制度設計の要点 鈴木 寛

民主党参議院議員

③これまでの院内事故調査の問題点 前村 聡

日本経済新聞記者

第2部 ディスカッション(シンポジスト)

神谷法律事務所 弁護士 神谷 恵子

厚生労働省医政局総務課医療安全推進室長 佐原 康之

医療の良心を守る市民の会事務局長・セーフティマネージャー)

豊田 郁子

東京女子医科大学病院医師 心臓血管外科 西田 博

ジャーナリスト・日本経済新聞社 前村 聡

東京大学医学部附属病院救急部教授・モデル事業東京地区代表

矢作 直樹

国立がんセンター がん医療情報サービス室長 渡邊 清高

(11) 大野病院事件判決の報告

平成20年10月27日

ジャーナリスト・日本経済新聞社 前村 聡

(12) 院内事故調査ガイドブック作成作業

平成20年11月～平成21年1月

(13) 院内事故調査の問題点についてのインタビュー

平成21年 2月19日

名古屋大学付属病院心臓外科教授 上田 裕一

(14) 全国社会保険病院の院内事故調査体制に関する現状調査アンケートの結果のまとめと発表

平成21年 3月 3日

○日本川崎病研究センター(共同研究A:1号事業参照)

(3) 3号事業 人文・社会の諸科学からの視点をも含む総合的な生存モデルに関する調査研究

○脳・心と教育研究会(自主研究A:1号事業参照)

○脳・身体の日内リズムに基づいた教育・学習研究会(自主研究B:1号事業参照)

○代替医療と倫理研究会(自主研究C:1号事業参照)

○生存環境における「癒し空間」の創造研究会(自主研究D:2号事業参照)

○川崎病研究会(自主研究F:1号事業参照)

○口腔環境研究会(自主研究H:1号事業参照)

○人類生存に向けたナノテクノロジーの可能性と倫理研究会(自主研究J:1号事業参照)

○医療政策研究会(自主研究K:2号事業参照)

- 患者本位の医療を支える仕組みとツールに関する研究会（自主研究M：1号事業参照）
- 日本川崎病研究センター（共同研究A：1号事業参照）
- (4) 4号事業 上記各号の調査研究に基づく総合的な健康政策に関する調査研究
  - 「元気と病気のあいだ」研究会（自主研究C：1号事業参照）
  - 生存科学研究会（自主研究E：1号事業参照）
  - 川崎病研究会（自主研究F：1号事業参照）
  - フランスの医療改革に関する研究会（自主研究G：1号事業参照）
  - 現在の保健医療制度の源流を探る研究会（自主研究I：1号事業参照）
  - 人類生存に向けたナノテクノロジーの可能性と倫理研究会（自主研究J：1号事業参照）
  - 医療政策研究会（自主研究K：2号事業参照）
  - 「患者本位の医療」を支える仕組みとツールに関する研究（自主研究M：1号事業参照）
  - 日本川崎病研究センター（共同研究A：1号事業参照）
- (5) 5号事業 上記各号の調査研究に関する国際教育研究機関との連携
  - 脳・心と教育研究会（自主研究A：1号事業参照）
  - 脳・身体の日内リズムに基づいた教育・学習研究会（自主研究B：1号事業参照）
  - フランスの医療改革に関する研究会（自主研究G：1号事業参照）
  - 日本川崎病研究センター（共同研究A：1号事業参照）
- (6) 6号事業 その他上記各号に関連して必要となる調査研究
  - 川崎病研究会（自主研究F：1号事業参照）
  - 日本川崎病研究センター（共同研究：1号事業参照）

学術誌「生存科学」の発行

- |                    |            |
|--------------------|------------|
| (1)VOL. 19, SER. A | SEPT. 2008 |
| (2)VOL. 19, SER. B | MAR. 2009  |

### 3. 一般的運営について

本年度も事業活動は活発に行われた。①脳・心と教育研究会は「脳科学と芸術シンポジウム」を2回、②生存科学研究会はシンポジウム『人生の健康—よりよく老いを生きる—』を、③現在の保健医療制度の源流を探る研究会は「戦後日本の国際保健医療協力について」と題したセミナーを、④人類生存に向けたナノテクノロジーの可能性と倫理研究会は同じく「A Critical Examination of the Impediments to Global Bioethics」と題したセミナーを、⑤医療政策研究会はシンポジウム「院内調査と『事故調』の役割—安全文化構築の契機となる事故調査を求めて」を、⑥「患者本位の医療」を支える仕組みとツールに関する研究会はシンポジウム「英国における医療の質・安全の取り組み」、特別講演「医療事故対策とリスク・シェアリング」をそれぞれ開催し、研究会の成果について広く世に問うことができた。また、⑦脳・心と教育研究会は「脳科学と芸術」と題した単行本を出版、⑧口腔環境研究会は3年間の研究成果を小冊子にまとめ、日本歯科医師会や大学教育機関に配布、⑨医療政策研究会は、医療事故調査に関する医療安全調査委員会の第3次試案に対す

るパブリックコメント、医療事故調査に関する医療安全調査委員会の大綱案に対するパブリックコメント、院内事故調査体制に関する調査報告書を作成、現在院内事故調査ガイドブックを作成中である。⑩フランスの医療改革に関する研究会は医療システム改革の基礎研究会報告書、プライマリーケア組織と医療・福祉の連携に関する研究およびフランスの医療改革に関する研究会報告書を小冊子にまとめた。

事業成果については基本構想委員会および生存科学研究会により、事業が初期の目的を達成できたか、研究費配分は適切であったかなど、事業結果についての検討が加えられ、研究体制の基盤強化に向け努力が払われた。